

都市の中の余白

先日、東京・神保町にある築80年の九段下ビルで、人間国宝の講談師・一龍斎貞水さんによる怪談のイベントが開かれた。演目は、日本三大怪談の一つとも言われる「真景累ヶ淵」。ところどころコ

ンクリートの塗装がはがれた廃墟のような雰囲気、超一流の腕を引き立たせ、居合わせた皆

が話芸に聞き入った◆密閉された演芸場とは違い、通りの音が聞こえてくる。途中で地震が起きて、ヒヤリとするハプニングも。だが、この場全体が今回の舞台。「風情があつて良いかもしれないね」とは貞水さんの弁◆50枚弱のチケットは即座に

記者手帖



完売したという。新しいビルに注目が集まる一方で、こうした老朽化建築物や遺構も人気がある。九段下ビルもいずれは建て替えの時間が来るのだろう。仕方がないことだが、少し寂しい気もする。長い間そこに存在し廃れてゆく建物でしか、醸し出すことので

きない魅力もある◆再開発では、着工前に地権者は別の場所に移転し、街はいっ

たん、ゴーストタウンになる。取り壊される前の期間を有効に使って、九段下ビルを築してみたいというのが、主催者である新藤典子さんの狙い。普段は使われない都市の中の余白を埋める作業のように思えた。